

芳年写生帖

野村胡堂

青空文庫

絵師の誇り

霖雨りんうと硝煙のうちに、上野の森は暮急くれいそく風情でした。その日ばかりは時の鐘も鳴らず、昼頃から燃え始めた寛永寺の七堂伽藍がらん、大方は猛火に舐め尽された頃までも、落武者を狩る官兵の鬨なげの音が、遠くから、近くから、全山に木精こだまを返しました。

「今の奴、何処どこへ逃げた」

「味方を四五人騙し討ちに斬って居るぞ。逃してはならぬ奴だ」

「まだ遠くへは行くまい」

「見付かったら、朋輩の敵、一ひとと太刀ずつ斬るのだぞ」

背負しよい太刀、ダン袋、赤い飾毛をなびかせた官軍が五六人、木立を捜さがり、藪を分けて鶯うぐいすすだに谷の方へ降りて行きます。

その背後うしろから、物の影のように現われたのは、彰義隊士しやうぎたいし 日下部欽之丞くさかべきんのじやう、二十四五の絵に描いたような美男ですが、軽傷あざでを受けた上、幾人か斬った返り血が、乱みだれ鬢びんと、蒼い頬と、黒羽二重くろはぶたえを絞った白しろたすき襷たすきに反映して、凄まじさというものはありません。

「敵な舌鼓を一つ、四辺を見廻した欽之丞は、又も近づく人影に驚いて、木立の蔭に身を潜めました。」

「畜生ッ、——俺は怪しい人間じゃねえ」

血の臭いに酔って、無暗に吠え付く犬を叱り乍ら、桐油をすっぽり冠って、降りしきる細雨の中をやって来たのは、絵師の月岡米次郎こと、大蘇芳年の一風変った姿です。

明治元年五月十五日の夕刻。

その時芳年は三十歳、御家人の子に生れて武士の血を享けた筈ですが、月岡雪齋に養われ、菊池容齋、葛飾北齋の風を学んで、心も姿もすっかり町絵師になり切つて居りました。

浅葱の股引に草鞋がけ、桐油に上半身を包んで、目ばかり出した風体は、腰の矢立てと懐の画帳が無かつたら、葛飾在から来た水見舞と間違えられるでしょう。

油のような生温かい雨が降るのに、芳年の身体は、ガタガタ小刻みに顫えて、時々はしやつくりをして居ります。その上足許も不確かで、ヒヨロヒヨロと行っては、ぬかるみに足を取られて、泥の中へへタへたと坐つたりしました。

そのくせ、藪の中や道の上に、斬られて死んでゐる死骸を見ると、彰義隊であろうと官兵であろうと一々覗いて、その相好と、歪んだ姿態を見極めずには居られなかつたのです。

「ひどい傷だが、——仏様のような穏かな顔をして居る」

そんな無事な死顔は、芳年の興味を引かなかつたのでしよう。

「これは凄い」

時々は死体の前に踞しゃがんで、懐から出した半紙横綴の帳面に矢立の筆を抜いて——細雨をかばい乍ら、写生の筆を走らせました。

不意に——

「居たぞ居たぞ」

バラバラと押おつ取とり巻まく官兵、ギラリギラリと幾いくすじ条かの刃が芳年の眼に焼け付きました。

「あッ、お許し」

驚き騒ぐ芳年、桐油を引きむしられて襟髪を掴まれたまま、二つ三つ小突き廻まわされます。

「何者だッ、うぬッ」

「お許し、お許し下さりませ。私は怪しい者じゃございません」

行儀の悪い猫の子のように摘つまみ上げられた芳年は、意気地無くもガタガタ顫え乍ら、両

手を合せて居ります。

「怪しくないことがあるものか。其処そこで何をして居た」

風体は落武者とも見えません。多分戦塵のまだ納まらぬ山内に潜り込んで、掠奪を目論もくろむ泥棒とでも思つたのでしょうか。

「絵を描いて居ります。私は、私は芳年と言う浮世絵師で——」

「何？ 浮世絵師？ 出鱈目でたらめな事を言えい。浮世絵師と言えば、美人や、役者や、道中の景色などを、面白可笑おかしく描いて、子供の慰み物にするのが稼業ではないか、——どれ見せい、貴様の絵は——何なんだこりや、どれもこれも、気味の悪い、斬り合いや、死骸や、梟さし首しらばかり、これでも浮世絵師と言うのか、怪しい奴ツ」

頭立かしらたつた一人の武士、芳年の写生帳をバラバラと開いて、不審の眉を顰めます。

「そ、それは違います。あなたの仰おつしやる遊女や役者や道中絵を描くのは、泰平の世の浮世絵師、——子供の慰みにする気はなくとも、世の中に事が無いと自然絵までが穩かになります、此節このせつのように、斬つた張つたの世の中、耳元で鉄砲の音のする時節には、それ相応の浮世絵がなくてはなりません。この世の中に様々な姿を、あるが儘ままに写して、後の世に伝えるのは、絵筆とる者の勤めでございます。——今時華魁おいらんや役者の絵を描い

て、一人で悦に入っていていられましょうか」

芳年は一所懸命でした。自分に掛けられた疑惑を解くというよりも、硝煙と血潮の洗礼を受けた浮世絵師の、精一杯の誇りを——斯う高らかに言つてやり度かつたのです。

「可笑おかしな奴だ、言う事は一通り筋道が立っているが——そのくせガタガタ顫えて居るじゃないか。そんな臆病者に、血ちなまぐさ腥い場面が写せると思ふか」

「写しますとも、へエ、身体の顫えるのは疳かんのせい、私の臆病のせいじゃございません。こんな時本当に突き詰めた人間の姿を写して置かなきゃ、——私は浮世絵師に生れた甲斐かひがありません。何んの」

「よし、それじゃ、もつと凄いとこを見せよう、一緒について来い」

「へエ——」

「さア」

促されて芳年は起ち上りましたが、意気地無くも膝ちようつがいの蝶た番がが崩れて、へタへたと綿ぬかるみのように泥ぬかるみ濘へ坐つてしまいます。

「た、起てません」

「ハツハツ、馬鹿な奴だ。腰が抜けたのか、そんな事で本当の戦が描けるものか」

「少し気を落付けおちつさせて下さい、直ぐ治すります」

「よしよし、何時いつまでも腰抜の相手になつても居られまい。誰か二人ばかり、此辺で見張つて居るが宜いい、我々はもう一度落武者を狩り出して来よう」

芳年は腰の抜けたまま、松の根方に縛り付けられ、官兵二人はそれを見張るともなく残されました。

あとの一隊はバラバラと上野の森へ、暮れ残る道を取つて返します。

落武者欽之丞

「やい、絵師」

「へエ——」

「俺を描いて見ろ」

「へエ——」

「この武者振りを一つ描いて見ろ、出来が良かったら、国への土産みやげにしてやる」
一人の官兵は威儀を作りました。

「縛られて居ちや描けません」

芳年は泣き出しそうでした。

「よしよし、それじや暫らくの間縄を解いてやる。その代り絵の出来が悪いと勘弁しないぞ」

「それじや御免蒙ります」

「何？」

「出来不出来は臨本次第で、一たん筆を執った上は、私の儘にもなりません」

「俺の武者振りが悪いというのか」

「そう言うわけじやございませんが、お気に召さないといいけませんから、描くのは勘弁して下さい——死人や梟し首と並べて描いちや、第一気色が悪うございます」

芳年は縛られ乍らも、頑強にはね飛ばしました。こみ上げて来る強大な自尊心がガタガタ顫え乍らも、斯う言わせずには措かなかつたのです。

「無礼な奴だ、そんな事を言うと、痛い目を見るぞ——絵描きだと言っても、描くところを見なければその帳面の絵だつて、誰が描いたか解つたものじやない。其方、彰義隊の落武者ではないか」

「と、飛んでもない」

そう言う芳年の後に廻って一人は鏢を鳴らしました。

「此奴、斬って捨てようか」

「フム、それも宜かろう」

二人は何やら合図をして居ります。

「あッ、お許しを。私は、彰義隊なんかじやございません」

颯と来た一刀、縛られ乍らも危うく首を縮めました、二度目の太刀は防ぎようはありません。

が、その時奇蹟が起りました。芳年の頭上に振り冠った一刀は宙に飛んで、

「あッ」

飛退く官兵の一人は、足を茹られて屏風の如く倒れたのです。

「己れッ」

飛付くもう一人の官兵の前へ、石垣を這い上ってスツクと立ったのは、先刻姿を隠した日下部欽之丞の満身に返り血を受けて、地獄の底から跳出した、幽鬼のような物凄い姿です。

二人の官兵はよく闘いましたが、一人は足を刳られ、一人は不意を喰って、死物狂いの欽之丞の敵ではありません。真にあつと言う間に、左右に斬って落されました。

二人の官兵を片付けた欽之丞は、芳年の側に寄って、夕闇の中からその顔を差覗さしのぞきましました。

「氣を喪うしなつたのか、馬鹿な奴」

冷たい笑が頬わらわに淀んだのもほんの暫らく、次の瞬間、欽之丞の手は、芳年の縄を解いて、その着物を剥ぎ始めます。

「あッ、お助け、命ばかりは——」

芳年は漸ようやく氣が付きました。

「命は取らぬが、その方の着物が入用なのだ、暫らく借りるぞ」

武装を脱ぎ捨てた欽之丞は、芳年の袷あわせを着流し、脇差だけ一本、深々と懐に呑み、幸い道端の水溜りで、ザツと手足や顔の血潮を拭き取りました。

心持鬻を直して、芳年の手拭を取上げて冠かぶると、何どうやら彼こうやら町人らしくなります。「それ、これは礼だ」

ボンと投ほうり出したのは小粒が二つ三つ、

「あ、もし、お武家様」

芳年はその小粒には目もくれず、襦袢一つの姿で泥の中に起上りました。

「何んだ、金が不足か」

振り返った欽之丞、弥蔵さえも拵えて、頬冠りの中に匂う顔は、歌舞伎芝居の花道で

見るような男振りです。

「その帳面だけは返して下さい、——そいつは、私の命から二番目で」

「これか」

無意識に懐にねじ込んだ帳面を取出すと、欽之丞はポンと投ります。

「あ、泥が附くじやありませんか」

絵師の憤懣が、ツイ軽い抗議になります。欽之丞はそれを耳にも掛けず、夕闇の濃くなり行く上野、谷中、道灌山かけての木立の中を見て居ります。

「待て待てツ、怪しい奴」

不意に藪を分けて一人、日下部欽之丞の行手に立ち塞がりました。羅紗の陣羽織、細雨を凌ぐ陣笠、抜刃のままの一刀を側構えに、一寸の油断も無い気組です。

「へエへエ、私共は土地の者でございます。戦見物と申しちや悪うございますが、一生に

一度の事と存じまして、ツイ、ウカウカと深入りいたしました。お見逃しを願います」
 日下部欽之丞は腹からの町人らしい滑らかな調子でした。江戸侍の器用さでしょう。

「もう一人の男は裸体はだかじゃないか」

「連れは落武者に剥がれました」

日下部欽之丞ケロリとしてこんな事を言うのです。

「頬冠りを取れ」

「へエ——」

「頬冠りのまま武士に挨拶する奴があるか」

「へエ——」

欽之丞の左の手は挙りました。頬冠りを取ると見せて、右手は早くも懐の申の脇差の柄
 に——

「え——ッ」

紫電一閃、

「わッ」

羅紗陣羽織の肩から鮮血を吹き上げて、相手は倒れたのです。

「お助けッ」

芳年も、あまりの事に肝を潰して、欽之丞の足許に這いました。

「馬鹿奴^めツ、何んと言う声だ、斬られたのは貴様ではないぞ」

「へエ——」

「其方の住居は何処^{どこ}だ」

血刀を拭い乍ら、欽之丞は訊ねました。

「あ、浅草の馬道でございます」

「大して遠くはないな、——今晚一と晩俺を泊めろ」

「——」

「いやか」

生血を拭いたばかりの刀が、芳年の眼の前へ、思わせ振りに動きます。

「と、飛んでもない」

「では、案内せい、——こんなところに長居は無用だ」

「——」

「さア」

促され乍ら、芳年は此処ここに釘付けになりました。夕闇の中に絶え入る、今斬られたばかりの武士の相好が、芳年の興味を犇ひしと捕えたのでしよう。

何時いつの間にやら取出した帳面、それをガタガタ顫える膝の上に展のべて、芳年は矢立の筆を嚙んでいたのです。

悪い相談

それから四五日、江戸には血生臭い風が吹き続けました。

その風に憑かれてもしたように、大蘇芳年は、朝から晩まで、街から街へと、物騒な噂を追い歩いて居たのです。

小塚ケ原の刑場は言うに及ばず、彼方かなたの橋の袂たもと、此方こなたの長屋の裏で、彰義隊の落武者が、薩長の巡邏じゆんら兵に見付けられ、縛られ、斬られる有様を、吐気を催すような嫌悪と、病的な熱情とで、一々画帳に納めなければ承知しなかつたのです。

馬道の留守宅では、押かけ女房のおよつが、これも押かけ落人おちうどの目下部欽之丞を介抱して、世間を狭く暮して居りました。およつは、園花そのばなと言つて千住こつで勤めた女で、年ねんが

明けると、大した歓迎もしない芳年のところへ轉げ込み、女房気取りで三月四月も納まっていると言った質の女でした。

「本当にあの晩ほどびっくりしたことは無いよ。襦袢一枚のあの人の後から、彰義隊へ入ったという欽さんが、のそりと入って来るんだもの——」

およつは、芳年の留守の間、狭い六畳の、目下部欽之丞の枕許に坐り切りで、根が生えたように、斯う話し込んでいます。

「俺だつて驚いたよ。此春年が明けて、千住から消えたお前が、場所もあるうに、俺が逃げ込んで来たへボ絵描きの家の、長火鉢の前に納まって居ようとは、お釈迦様でも気が付くわけはねえ」

欽之丞は、そんな伝法な口をききます。腕はよく出来ませんが、旗本の冷飯食いで、およつの園花とは、二年前からの深間だったのです。

「でも、斯うして逢えたのも、深い縁じやないかね工欽さん、——いくら私が凶々しくたつて、旗本のお屋敷へ、誓紙起証を振り廻して乗込むわけにも行かず、仕様ことなしに一番甘そうなお客の絵描きの家へ轉げ込んだのさ。其処へ落武者になつた欽さんが飛込んで来るなんて、草双紙にも滅多に無い筋じやないか、——あの通り世間は物騒だし、幸い主

人は朴念仁ぼくねんじんで二人の仲に気が付かないから、五年でも十年でも、神輿みこしを据えて逗留して
おくれよ、ね欽さん」

長い煙管きせるを吸い付けて布団の中へ入れると、およつの身体からだは横つ坐りに、肘はもう、男
の布団へやわやわと重しになるのでした。

「傷はもう癒なおったぜ、何時いつまでも斯こうしていた日にや、人間の造作が弛ゆるむよ、後生だから
起おこしてくれ」

煙管きせるをポイと投ほうつて、欽之丞は枕へ頬杖を突いたなりに、下からおよつの滴したたる風情を見
上げるのです。

「あれさ、お前、起き出した時は、追い出される時じゃないか、それに縁側やお勝手でウ
ロウロされちや、近所の人の手前もあるし」

「その近所に、飛んだ綺麗な娘が居るじゃないか」

「まあ、呆れたよ。もうあれを見たのかい、——でもあれだけはお止よしよ。お浜坊はまぼうと言
つて、素人しろうとのくせに飛んだ摺すれつからしき。何処どこが良いか知らないが、うちの朴念仁に
ポーッと来て居るんだつて、ホホ」

「へエ——、芳年師匠、芸道ばかりと思つたら、そんな腕もあるのかい」

欽之丞は何処までも面白そうです。

「そう言うけれど、私はつくづくあの人が怖くなることがあるよ」

「あんまり物驚きをする柄では無いようだが、——何が一体怖いんだ」

「あの通り、絵を描くより外に望みの無い人だし、臆病なほど大人しいから、踏台に丁度よかろうと思つて連れ添つて見ると——」

「——」
およつはごくりと固唾を呑みました。

「あの通りの良い腕を持ち乍ら、右から左へ金になる、華魁や役者の絵を描くのが大嫌いで、たまたま筆を取るかと思えば、不気味な無慚絵ばかり——、そんなものが金になるわけが無いから、家の中は何時まで経つても火の車さ」

「——」
「上野の戦さが始まると、その病は嵩じるばかり、毎日目の色を変えて飛出しては、斬り合があつた、晒し物があつたと、三里も五里も歩き廻つて、暗くなつてから、狐が落ちたような顔で帰つて来るんだもの」

およつはそう話し続け乍ら、何んとなく胴顫いを感じる様子です。

「私はつくづく愛想を尽き果てたよ。幸い飛込んだお前さんは、私の為には渡りに舟さ、迷惑だろうけれど、何処どこへなと連れて逃げておくれ、ね欽さん」

「俺もそれを考えないわけじゃ無いが、何んと言つても、まだ探索の目が厳しいから、一と足路地を出たら、どんな事になるか解つたものじゃない。それに何処どこへ行くにしても先立つものは金だ」

「それなら幸い——」

およつは、少しばかり隠して持つている、自分の虎の子のことを考えて居ました。

「三河島みかわしまには縁家がある。今日芳年が出る時、一筆書いて持つて行つて貰つたから、今にも歸つて来たら、何とか返事があるだろう」

日下部欽之丞は、何時いつの間にもやら、床の上に起直つて居りました。二つ三つ受けたかすり傷は、もうすっかり癒つて、此儘函館へも飛べそうな心持です。

「それじゃ、私が一緒に行けないではないか。あの人に行先まで教えてしまつては、命の鍵を握られているも同様、それに、二人の仲を薄々嗅ぎつけた様子だから、後腐れのないように、バツサリやつて、何処どこか遠くへ飛ぶ工夫が肝心だと思うが——」

およつはの肝の太さ、あまり気の進まぬ日下部欽之丞を説き伏せて、底の知れない悪魔の

淵へと誘い入れる積りでしょう。

隣の娘お浜

「ちよいと」

ひそやかな声に呼止められて、芳年は思わず足を淀ませました。今日は不思議に早く帰った路地の入口、共同井戸の前に、白い顔が自分を見詰めて居たのです。

「お浜さんじゃないか、何んか用事かい」

芳年は気軽な調子で斯う立ち止りました。世帯摺れはして居りますが、十九になったばかりのお浜には、娘らしさが、顔にも姿にも、声の爽やかさにも充分過ぎるほど匂って居たのです。

「今入って行くのは、お止しなさいよ、迷惑する人が二人あるようだから」

その娘の口に含んだ毒が、妙に芳年を焦立たせます。

「何?」

「ね、芳年さん、人のことだけど、私はもう、腹が立って腹が立って、あの彰義隊の生っ

白い二本差を、いつそ屯所へ訴人してやろうかと——」

「シツ——」

二人は継穂もなく、黙つて顔を見合せました。

「お前さんが、あんまりお人よし過ぎるんですよ。あんな恩知らずの畜生は、なぶり殺しにでもされて——」

「なぶり殺し？」

「首は三尺高い木の上に梟さうされ、死骸は犬の餌えにでもなりや宜いに——」

お浜いかりの怒は際限もなく爆発します。芳年をいとしと思う心が、斯こうまで極端に働いて、全く違つた方角へ忿怒の形で発展して行つたのでしよう。

「刪なぶりり殺し、——梟さうし首、——そして死骸は犬に——」

芳年の空想力は鼓舞されました。無慚絵の素晴らしい題材が、お浜の言葉の上に、活いきいき々と築き上げられて行くのです。

「足りない、まだ足りない」

江戸人の心を恐怖のドン底に投込んだ、私刑、暗殺、押おしこみ込、斬きり合あい、——そして最後に彰義隊の戦争から、寛永寺三十六坊の炎上、八百八町の落武者狩までの、血と焰の印象

が、まだまだそんな事では表現し切れなかったのです。

「何が足りないと言うんです、え？」

「凄さが足りない」

「え？——お前さん、しっか確りして下さいよ。あんな二本差なんか、芋侍に引渡ひきわたしさえすれば、それでお仕舞なんだから」

お浜には、芳年の心持が解る筈ありません。日下部欽之丞とおよつの関係を言い当てられて、フラフラと気が変になったのであるまいか——お浜はそんな事を考えるのが精一杯だったのです。

「放つて置いてくれ、お浜さん、俺にも少しは考えたことがあるから——」

解つたような、解らないような事を言い捨てて、芳年は自分の家へ入って行きました。

「——」
その臆病らしい姿、作り笑いさえ浮べた横顔を、お浜はどんなに腑甲斐のないものと思つたのでしよう。

御家人の子に生れて、その描く絵と同じように、骨つぽい男らしい人柄を見上げる心持で居たお浜は、近頃の芳年の意気地のない態度に、言いようのない憤懣を感じて居たので

す。

「皆みんなあの女のせいだよ」

お浜の眼には、恥というものを、何どこ処かに置き忘れて来たような、およつの白粉おしろい焼やけのした顔が、はつきり浮ぶのでした。

恐ろしい予感

「日下部さん、御安心なさい。三河島の御親類じゃ、日下部さんが無事と聴いて、大喜びでしたよ」

芳年の言葉にも態度にも、何んのこだわりもありません。

「それは有ありがた難い」

日下部欽之丞は、ツイ今しがたまで、およつと、よからぬ事を企んでいたことなどは、綺麗に忘れてしまった様子です。

「で、——馬道よりは近所が遠いだけでも身を隠す都合が宜からうから、すぐおつれするよようにと、斯こう言うお言葉でございました。世間が物騒だから、お返事を口移しで、書い

たものは持つて参りませんから——」

「それで結構、飛んだ御苦労であったな、早速支度をして、今夜にも出かけるのでしょうか」
欽之丞はもう、まだ癒らぬ首の傷のことも忘れて、床から飛起きて居りました。

「いえ、夜は反かえつて物騒ですよ。私は諸方をほつき歩いて、其辺中の官兵の屯所は、一つ残らず顔かお馴染なじみだから、私と一緒にいっしょにお出でなさい。とがめられたら、私の弟子ということにしましょう。陽の当るうちの方が、どんなに安心だかわかりません」

「成程なるほど、そう言ったものかも知れぬな」

日下部欽之丞は支度を始めました。月代さかやきを広く取って、根を下さげた町人鬘まげ、芳年の袴あわせ、手拭はわざと肩に、脇差は鐔を外して懐に隠し、突っかけ草履ぞうりで、芳年の後に続きます。

「ね、欽さん」

「——」

門口まで追つて出たおよつ、芳年がひと足先へ行つたのを確かめて、

「わざと途中で手間取つて、何処どこか人ひと気の無いところだ——」

およつは手刀で、そつと物を切る真似まねをして見せます。

「それが、およつ——」

「待つてますよ、暗くなったら、直ぐ迎いに来て下さい。解つて欽さん」

欽之丞はうなずくと、一と足先に行つた芳年の後ろ姿を追いしました。

未刻やつから申刻頃みなつまで、

およつは坐つても起つてもいられない心持でした。長火鉢の前へ行つたり、門口へ出たり、お勝手を覗いたり、煙草たばこを吸つたり、茶を呑んだり、溜息をついたり、

「欽さん」

何んか邪よこしまなことを念なずるような心持で、不思議に胸騒よこしぎに悩み続けたのです。

ヒョイと見ると、垣の間から白い顔、

お浜の狷ずるそつ相ずるそつな眼と、人を馬鹿にしたような——その癖、男好きのしそうな赤い唇が見えるではありませんか。

「何んだい、お前は？ 昨日も一昨日もおととい、雌犬のように、変なところから覗いたりして、いくら棟割長屋だつて、垣の中は人様の城郭だよ、風の悪いことしやがると、水ブツ掛けるから」

およつは気が立つて居りました。

「芳年さんは、まだ帰らないの？」

お浜の調子の邪念の無さ。

「それが何うしたと言うのだえ？」

ツイ釣られるともなく、およつも縁先へ泳ぎ出しました。

「だって、ツイ先刻さつき、田圃たんぼで彰義隊の落武者が捕まって、斬ったとか斬られたとか、大變さわぎな騒さわぎをしたようだから、此方こつちに何んか変りが無きや宜いと思つて——」

お浜の調子のさり気ない滑らかさは、およつに取つては、此上もない威嚇でした。が、——あんなに用心深い支度をして行つた欽さんに、万に一つ間違ひなどある筈もありませぬ。あの人が訴人するか、屯所へ引渡したのなら別だけれど、あんな臆病者に、そんなことが出来る筈も無し——盛もりあが上つて来る恐怖を、無理にも押付けて、およつは乾く唇を噛みました。

「彰義隊の落武者？ そんな者に掛り合ひは無いよ。余計なお節介をするより、さつさと自分の家へ歸つて、内職の楊枝でも拵えるが宜い、馬鹿馬鹿しい」

「そんなら宜いけれど——」

お浜は煮え切らぬ事を言い乍ら、臆病な狐のように、振り返り振り返り歸つて行きます。

「畜生ッ、何んて嫌な奴だろう」

およつは縁側から引込みました。

が、その時丁度、格子を開けて、何時いつになく、ノソリと入って来た、大蘇芳年の蒼い顔と、眼を外そらしようもなく、ハタと逢ってしまったのです。

「あッ」

恐ろしい予感が、水のようにおよつの背筋を走りました。

血に狂う美女

「およつ、居たか」

洞うつろな声、眼はギラギラと瀬戸物のように光ります。

「お前さん、何んて顔だい、——あの人もが若しや？」

およつの言葉は喉の中で消えました。

「田圃たんぼで官兵に捕まったよ」

「えッ」

「上野で散々官兵を斬つたことを知つて居る者があつて、其場でなぶり殺し同様」

「じゃ、矢張り」

「これを見ろ」

芳年は、ポンと画稿を投げました。

手に取つて見る迄までありません。およつの膝の前でパツと開いたのは、矢立の墨一色で描いた、至つて粗末な略画乍ら、紛れもない町人姿にして出してやった日下部欽之丞が、多勢の官兵に取巻かれ、乱刃の下に斬りさいなまれてうらみいる怨の形相です。

「えッ、畜生」

およつは画稿を叩き付けて、いきなり芳年に武者振り付きました。

「あッ、何をするんだ」

「お前と言う男は、何んと言う卑怯者だい。私とあの人の仲を疑つて、力づくで叶わないから芋兵に、訴えて召し捕らせ、こんな虐むじたらしい目に逢わせやがったろう」

「俺がそんな事を知るものか、離せ」

「わざわざ陽のあるうちに連れ出したのは、これを絵に描き度いたために違いない。三月でも四月でも、一緒に住んだお前の心持が、私に解らないと思うのかッ」

「馬鹿なツ」

「お前は上野で官兵に斬られるところを、あの人に助けられたと言ったろう。一旦かくまった恩人を訴人して、義理も人情もない、それでも江戸つ児この端くれかい。畜生ツ、意気地なし、そのくせ、いけ図々しく、こんな虐むじたらしい絵まで描いて来やがって、ぬけぬけと私に見せるなんて、何んて根性だろう、外道ツ、鬼ツ」

およつは半狂乱でした。揉みも揉んだ姿で、芳年の首へ胸へ、髻たぶさへと武者振り付くのです。

「俺じゃない——誰か訴人をしたに違いないが、この芳年じゃ無い」

「それほど潔白なら、何んだって、こんな無慚絵なんか描いたんだ。人の死ぬのをヌケヌケと見ていて宜いものか悪いものか、思い知らせてやるから、畜生ツ」

小格子で年一杯叩き上げたおよつは、妖艶で取廻しの良い女でしたが、その代り、執拗で病的で、意地っ張りで気違い染みた女でした。

「待ちなよ、俺だつて人の殺されるのが面白いわけじゃないが、今の時世を写すには、こんなものでも描くより外に仕方が無い。天下後世に、俺の芸道を遺すためには、油汗を流し乍ら、齒はぎしりして、無慚絵を描くのだ」

「まア、何んと言う曲つた根性だろう。地獄の鬼だつて、そんな虐たらしい事ばかり追い廻しちゃ居まい——それほど芸とやらが大事なら、美事私も成敗しておくれ。お察しの通り欽さんは私の命まで打込んだ深間さ。それがどうしたんだい、畜生。さア、殺しておくれ、立派にやつておくれよ」

半狂乱のおよつは、芳年に身体を摺り寄せて、四方構わずわめき散らすのでした。

「馬鹿ツ、宜い加減にしないか。俺はそんなことで、人を殺す量見などは微塵も無い。気に入らなきや出て行くが宜い。どうせお前が勝手に飛込んで来た家じゃないか、死のうと生きようと、お前の好きなように——」

芳年もツイ持て余し気味に、およつの絡み付く身体をおし退けました。

「私一人で死ねと言うんだね、——ようし、あの人を訴人したお前の前で、見事死んで見せよう、驚くな」

いきなり台所へ駆け込んだおよつ、芳年がそれを追う隙もありません。キャツと言う悲鳴、——研ぎすました出刃庖丁で、我とわが喉も胸も、顔までも掻き切つて、満身鮮血を浴びたまま、よろばいよろばい這い出して来たのです。

「あッ、何んと言うことをするんだ」

「さア、この、私の顔をよく見ておくれ。この顔を、この姿を、——お前の筆で描けるものなら描いておくれ」

宙に泳ぐ手、銀杏いちよう返しの根はガツクリ抜けて、血潮の網目を引いた拳に、黒髪がバラりと絡みます。

女の顔は、美しいだけに凄まじいものでした。引釣ひきつる肩、ギラギラと死の苦痛を映す瞳め、血みどろの頬も唇も瘡撃して、綺麗な歯並はなみが、締木ひきぎにかけたようにギリギリと鳴ります。

「この顔を見て、お前が夜寝られるか寝られないか、——よく見ておくれ。欽さんを訴人した上に、この私まで、——手に掛かけなくても、なぶり殺しにしたお前だ——」

「待て、言うことがある。何も彼も間違かいだらけだ、——あれ、あれを聴け」

芳年は血に狂う手負いのおよつを辛くも抱き止めて、二軒長屋の隣家——お浜の家のたたずまいを指します。

生垣一つを隔てて、明けつ放した庭先の夕陽に、何も彼も手に取るよう。この時お浜の家には、隊長に従って官兵が七八人、ドカドカと入って来たのでした。

描き出す怨女の悪相

「日下部欽之丞を訴人した、浜というのは其方か。女乍ら、賊軍の大物を討たせた手柄は拔群だ。追つて褒美の御沙汰はある筈だが、取あえずお上のお言葉だけを伝えて置く」
そう言う官兵の隊長の声が、近所合壁へも聞えよがしに、凜々と響き渡るのです。

それを聴いたおよつ、芳年の腕の中に、必死の眼を見開きました。

「聴いたか、およつ、——あれで、何も彼も解つたろう。改めて言うまでもないが、——俺は唯ただの絵描きだ。世の態さま、人の姿は描くが、訴人や企らみをする柄ではない、——俺の言葉も耳に掛けず、お前は飛んだ早まったことをしてくれたいじゃないか」

「どうせ勤めをしたお前だ。馴染も深間もあつたところで、俺はそんな事でヤキモキするものか」

静かに説く芳年、隣の庭からは官兵が引揚げて、お浜のいそいそとした姿が、それを送つて出た様子まで手に取るよう。

「お前さん」

「解ったか、およつ」

「堪忍しておくれ、私は——」

今死ぬおよつの眼には、初めて油のような涙が沁み出しました。

「解つたらそれでよい。傷は浅い。静かに手当をするが宜い」

「いえ、私は助からない。助かり度くもない、——お前さんに済まないけれど、私は、私は欽さんの後が追つて行き度い」

およつは声もなく、芳年の膝の上に、身を顫わせて泣くのです。

「それも解っている、どうせこの俺とは浅い縁だ」

「堪忍して」

「可哀想に、——お前という女は」

「お前さん、——たった一つの願い、聴いてください」

「何んだ」

「お前さんは此間から、殺しも斬合いも梟^{やう}し首も描いたが、女の、怨女の末期は手本が無いと言つて居なすつた」

「——」

「幸い、この私の浅ましい姿、——息のあるうちに、描いて下さい、——せめてもの恩報
じ」

芳年の膝を降りたおよつは、最後の力を絞り出すように、柱に縋すがつたまま、フラフラと立ち上るのでした。

「それはいけない、——お前の顔に怨は消えた。死ぬ苦しみはあつても、怨女の悪相は無くなつてしまつた」

まこと、法悦に似たものが、血みどろなおよつの顔を、仏作つてさえ見せているのですが、形勢は一瞬にして変りました。

此時、隣の物音に気の付いたお浜が、官兵を送り出した序ついでに、庭の木戸を押し開けて、ヒョイと入つて来たのです。

「あッ」

目の前に展開した、血みどろの光景に、お浜は逃げることも忘れて釘付けになりました。「畜生ッ、お前が訴人したんだね、——この怨み、覚えてお出で」

お浜の顔を見ると、忽たちまちおよつに蘇よみが生える怨み、柱に絡んだ身体からだが醜みにくく歪むと、眼も、口も、一瞬蒼白い焰ほのおを潜つたように、深怨無残の悪相が、メラメラと燃え上るのです。

「助け——てエ」

あまりの事に、お浜は狭い庭の上に這いました。眼は縁の柱に伸上る手負に吸い付けられて、娘の身体はあまりの恐怖に蟲ほども動きません。

「口惜しいッ」

キリキリと鳴るおよつの齒、風の無いのに、サツとなびく黒髪、柱に絡んだ手が緩むと、手負の身体が、ゾロゾロと崩折れて、庭のお浜を覗き加減に、ワナワナと双手を差伸べます。

最早、背に迫る死の手、お浜をつれて、八寒地獄の底までも行く積りでしよう。

芳年は思わず画帳を取上げました。死の一瞬手前の、怨女の悪相が、名筆に従って、サラサラと描き上げられて行くのです。そのかみ、猛火の中のわが娘を見たという、仏画師良秀のように、——人の世の掟を超えた、芸道三昧の恍惚境にひたり切って、——浮世絵師芳年の顔は、名ある高僧のように澄み切ったのでした。

大蘇芳年の傑作「英名二十八人衆句」は斯うして出来上りました。徳川末期の江戸を彩った、血みどろの世界が、「団七九郎兵衛」になり「稲田新助」になり、「直助権兵衛」になり、そして怨を含んで殺されて行く、「笠森お仙」の美女殺戮の図となったの

です。

芳年の無慚絵が持った境地、その生々しいリアリズムは、明治画壇に大きなスタートを与えました。それが水野^{みずの}年方^{としかた}となり、落合^{おちあい}芳幾^{よしき}となり、輝^{てる}方^{かた}、英^{ひで}朋^{とも}、年^{とし}恒^{つね}、年^と英^{しひ}となり、そして巨匠^{きゆうしやう}鏑^{やぶら}木^ぎ清^{きよ}方^{かた}となったことは言う迄もありません。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社

2009（平成21）年6月30日第1刷発行

底本の親本：「芳年写生帖」春陽堂

1939（昭和14）年

初出：「オール読物」

1938（昭和13）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくつています。

※「્યાア」と「્યાア」、「まア」と「まア」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年8月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芳年写生帖

野村胡堂

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>